

DEEP DIVE Breaking News 005

076 型強襲揚陸艦とは

DEEP DIVE 小原凡司

2025 年 11 月 15 日に発信した DEEP DIVE Breaking News 004 は、076 型強襲揚陸艦「51 四川」が初の海上公試のために出港したことを伝えた。しかし、同艦についての説明が不十分であったため、追加的に、本レポートにおいて、同艦がどのような艦艇であるのかを紹介する。

「51 四川」は、中国最新の 076 型強襲揚陸艦の 1 番艦である。同艦は、満載排水量 40,000 トン以上、衛星画像で計測すると全長は約 260 メートル、幅は約 45 メートルである。右舷の 2 つのアイランド（前方上部構造物と後方上部構造物）の間、および左舷艦尾側に航空機用エレベーターが設置されており、この部分の艦の幅は約 55 メートルである。

2 つのアイランドのうち、艦首側のものは航海・操艦のため、艦尾側のものは航空管制のためのものとされる。2 つのアイランドを持つ構造も、075 型強襲揚陸艦と異なる点である。076 型強襲揚陸艦が艦尾側に航空管制専用のアイランドを設置しているとすれば、自艦から発艦する有人機だけでなく、複数の無人機および他の艦艇（空母）から発艦した戦闘機等を指揮・管制することを想定している可能性がある。

また、「51 四川」の右舷のエレベーターは、艦首艦尾方向に約 12 メートル、横方向に約 14 メートルであり、左舷のエレベーターは、艦首艦尾方向に約 12 メートル、横方向に約 17 メートルである。回転翼航空機の運用を想定する 075 型強襲揚陸艦のエレベーターは艦尾に設置されており、艦首艦尾方向に約 15 メートル、横方向に約 14 メートルである。これに対して、空母「18 福建」のエレベーターは、前後とも、艦首艦尾方向に約 18 メートル、横方向に 14～15 メートルであり、075 型および 076 型強襲揚陸艦のエレベーターはこれより一回り小さい。

最新の艦載戦闘機である J-35 の全長は 16.8 メートルである（同機が翼を畳んだ状態の全幅は不明である）が、エレベーターを用いて飛行甲板に上げる際に、機体の一部をエレベーターから海側にはみ出させることによって、076 型強襲揚陸艦も同型機を搭載し、格納庫甲板に格納することは可能である。

さらに、「51 四川」のカタパルトの長さは 112～113 メートルであり、空母「18 福建」

のカタパルトと同様である。カタパルトの外観のみを考慮すれば、076 型強襲揚陸艦は艦載戦闘機の発出が可能である。DEEP DIVE Breaking News 004 で伝えたように、現在、「51 四川」の飛行甲板には、空母「18 福建」のような明確な着艦拘束装置を確認することができないが、艦の構造に鑑みれば、将来、艦載戦闘機を運用する可能もある。



図1 上海滬東中華造船所に係留される「51 四川」（2025 年 11 月 13 日）

一方で、「51 四川」が装備するカタパルトは、少なくとも、前方 3 つの発着艦ポイントに干渉しており（図 1 参照）、また、着艦の際には全通甲板を全てクリアにする必要があるため、固定翼機を発着艦させる際には、回転翼機は右舷の 2 つのスポットのみが使用可能である等、その運用は大幅に限定される。

上述した「51 四川」の特徴から、同艦に続いて建造されるであろう 076 型強襲揚陸艦は、同時には実施できなくとも、準空母として有人・無人固定翼機を運用する航空作戦と回転翼機を用いた強襲揚陸作戦の双方の任務を遂行するための艦艇であると考えられる。しかし、カタパルトが 1 本であり、アングルド・デッキ（発艦用滑走路と着艦用滑走路に角度をつけた甲板）を採用していないことから、固定翼航空機の運用能力は限定的である。中国は現段階で、VTOL（垂直離着陸）機や STOVL（短距離離陸・垂直着陸）機を保有していないからである。

現段階では、076 型強襲揚陸艦は、作戦によって強襲揚陸作戦および大型固定翼無人機の運用を使い分け、将来は、状況によって限定的な艦載戦闘機の運用も行なうと考えられる。